運動種目主体の体育授業から運動種目を利用して考える体育授業への転換

－問いを立て，検証することで，自分なりの納得解を見出す－

小林　拓矢（静岡大学教職大学院）

１．目的

本研究の目的は，見方・考え方を鍛えるとは何であるかを問い，資質・能力の育成を企図した単元構想による授業展開によって検証し，考える力を高める体育の授業づくりに関する示唆を得ることであった。

２．研究方法

１）従来の体育授業の意識調査

S 県内 Y 市立 O 中学校生徒 439 名，Y 市内体育教師 12 名に質問紙調査を実施した。

２）学習指導要領【総則】の意図を紐解く

資質・能力，見方・考え方とは何かを問い，その視点から従来の体育授業を捉え直した。

３）生徒が自らの学びを営む授業実践

実践Ⅰ（5 月）は，「なぜ多くの人たちがスポーツ観戦で熱狂するのだろう？」実践Ⅱ（10 月）は，「スムーズな動きって，一体なんだろう？」という正解のない問いを設定した。共通の問いに対する自分なりの納得解をつくるための学び方（人，場所，もの，ペース）は，生徒が自己決定するものとした。

４）個々の生徒の学びの営みに迫る

単元を貫く学習課題（問い）に迫るため，生徒が選択した活動や考えの変化の意味について捉えた。

３．結果と考察

１）従来の体育授業の意識

生徒や教師の中で体育授業は，記録更新や運動量の確保という固定観念が根強く存在しており，教師の教科観が授業展開に影響し，生徒の抱く認識をつくり出す可能性が示唆された。

２）学習指導要領【総則】の意図を紐解く

資質・能力とは，自分で考えて判断する力，見方・考え方を鍛えるとは，知識は生徒自らが構築していくものと考えられた。従来の体育授業では，運動種目の内容を習得することが主たる目的であった。自分で考える力を高めることを共通の目標とし，運動種目を具体例として利用し行う学びへの転換が求められる。この視点によって，考える力を図１のように定義し，単元を構想した。授業実践による検証によって，単元の積み重ねがその内実の理解を深めていくと考えられた。

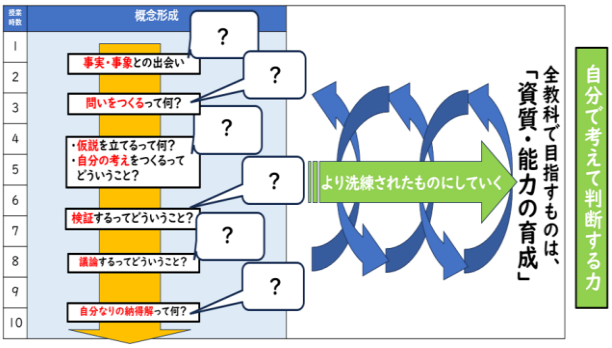

図１　自分で考える力の育成を企図した単元構想

３）生徒が自ら学びを営む授業実践

最初は問いに対して「何をすればよいかわからない」状態であった。自身の経験と関連させたり，新たな疑問を抱きながら，「やってみたらどうなるだろう？」という状態に変化し，時間の経過に伴って自分で学びを調整する場面が増えていく様相が見られた。実践終了後の生徒への質問紙調査から，生徒は多様な運動種目を利用して，問いに対する探究に取り組み，自分なりの答えをつくることが主たる目的であったことが捉えられた。

４）個々の生徒の学びの営みに迫る（生徒 A）

実践Ⅰでは，自分の考えをつくるために異なる複数の種目を利用して検証しようとしたが，問いと検証方法に一貫性がないまま学びが終了した。実践Ⅱでは，比較する検証を通して矛盾の発見や再検証したことで，批判的に捉えながら自分なりの納得解を構築することができた。つまり，内容が異なる単元の積み重ねによって，学び方が洗練されていく可能性が示唆された。

４．結論

学びは生徒が自らの営むものという捉えに基づき，教師の教科観を見直すことが求められる。